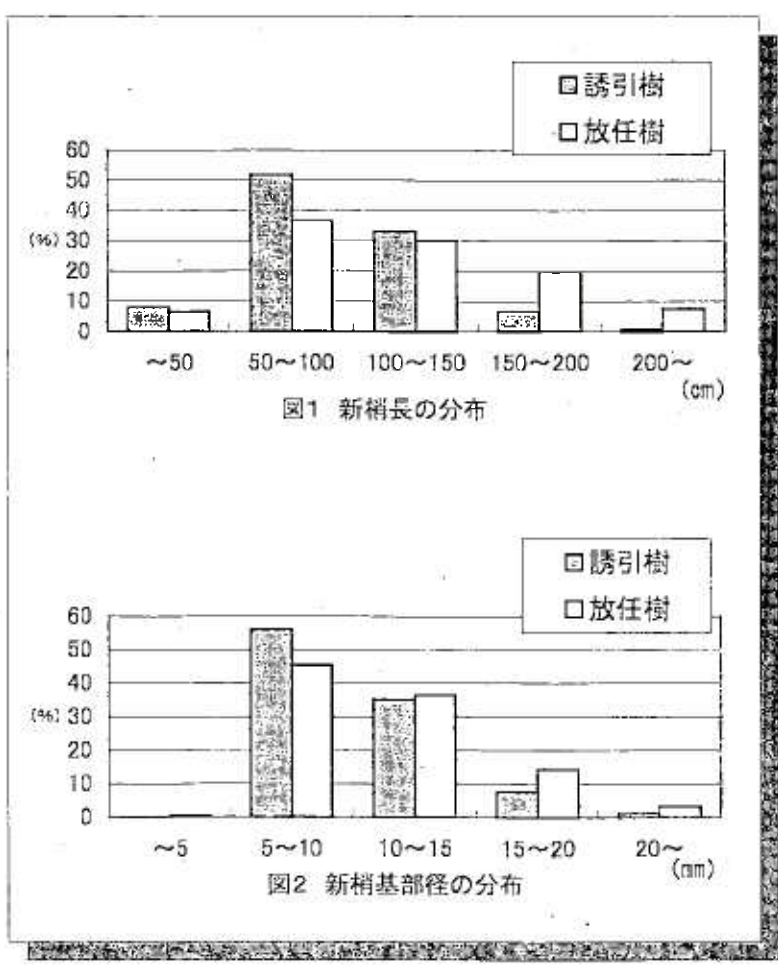




優良品種をつくりこなせ！
ナシ「あきづき」への取り組み

佐賀県果樹試験場 落葉果樹研究室 室長 稲富和弘



ナシの生産も終わり、来年に向けてせん定作業も始められていると思います。

今年は梅雨明け後、異常な高温続きで豊水ではみづ症の発生が多くなり、生産量が落ち込みました。

今後、夏期の高温対策が重要となつてきますが、豊水、新高のような生理障害の発生が多い品種については、「あきづき」などへの更新が急務な課題となっています。

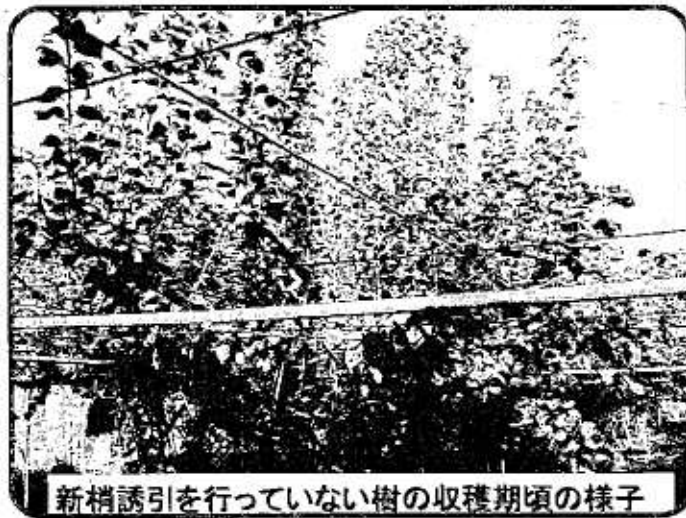
「あきづき」は、今年のような天

候でも生理障害の発生が少なく、高品質果が生産できました。

ここでは、「あきづき」栽培で最も重要と思われる花芽着生対策を中心に述べたいと思います。

これまで明らかとなった「あきづき」の生育特性

①新梢の着花性は低く、直上へ伸長する新梢にはほとんど花芽は着生しない。



- ②他の品種よりも分枝部からの新梢発生が多く、収穫後強大に生育し利用できない。
- ③一二月までに側枝を切除すれば、その切り口周囲部から高い確率で新梢が発生する。
- ④短果枝において無着葉果となる場合が多く、着果後は盲芽となる。
- ⑤また、翌年、盲芽に花芽が着生する場合がある。
- ⑥自然交配や開花期の不良条件(低温、強風下など)でも、他の品種より結実率が高い。

- ⑦着果した果実は、変形果やみつ症の発生が少なく、商品果率が極めて高い。
- ⑧果柄が短く、上向き果実は軸おれ果が多くなる。
- ⑨黒星病発生は「幸水」と同程度と思われるが、シンクイムシや夜蛾の被害は他の品種よりやや多い。
- ⑩以上のようなことがわかってきていますが、生産された「あきづき」は変形果やみつ症がほとんどなく、商品化率が極めて高い品種です。
- ⑪また、糖度が高く、細胞が緻密で

歯触りが良く、市場評価が高く、価格に厳しい時期ですが、単価の引き上げが期待できます。

花芽着生向上のための枝管理

「あきづき」では、えき花芽に着生した果実も大玉で果実品質も安定していることや、短果枝の維持が困難であることなどから、えき花芽の着生をいかに向上させるかが収量を

表1 新梢誘引による着花率向上

試験区	平均芽数	平均花芽数	花芽着生率
誘引区	21.0	8.5	40.5 %
放任区	17.9	1.7	9.4

できる最大のポイントとなります。数年、栽培されてきた中で枝管理の方法の違いによる着果量の差が現れてきています。

(一) 着花向上のための新梢管理

放任状態にするとほとんどの新梢は直上に伸長し、まったく花芽が着生しません。

反面、外周部の主枝、亜主枝などの先端の新梢は倒れやすく花芽の着生がみられ、このことが、樹冠内部の新梢がより徒長的に伸長する原因となっています。

五年生「あきづき」について満開後七〇日に主枝、亜主枝、側枝の先端の新梢を除くすべての新梢について柵面から四五度に誘引を行った結果、放任した樹と比較して新梢長が短く、基部径も小さくなりました(図一、二)。

また、同一樹において新梢誘引による花芽着生率を調査した結果、誘引により明らかに着花率は向上しました(表一)(写真一、二)。

(二) 新梢の育成方法

「幸水」においては、正常芽五芽程度で切り返して予備枝として利用しますが、「あきづき」においては「幸水」と同様な方法では着花は期待できません。

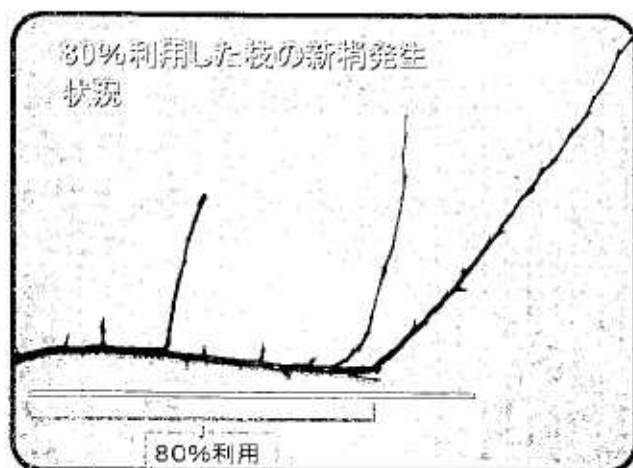
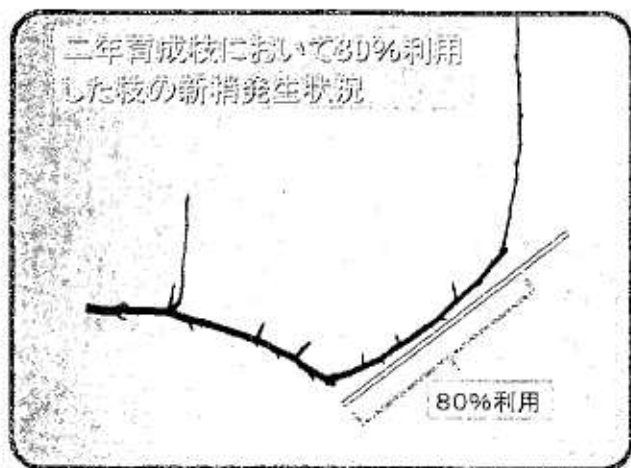


表2 切り返し程度の違いによる次年度の生育状況 (新梢の基部径 10mm)

試験区	短果枝花芽着生芽数	新梢の花芽着生率(%)	総新梢長(cm)	平均新梢発生根数
100%新梢利用	2.5	23.5	189.2	3.2
80%新梢利用	3.1	54.8	105.1	1.6
50%新梢利用	0.6	7.1	205.5	2.5

表3 新梢基部径の違いによる次年度の生育状況

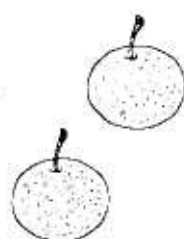
試験区	短果枝花芽着生芽数	新梢の花芽着生率(%)	総新梢長(cm)	平均新梢発生根数
基部径 10mm	3.5	58.5	115.2	1.7
15mm	4.1	36.8	159.4	2.4
20mm	4.5	23.1	181.2	2.1

表4 2年育成枝における花芽着生

試験区	短果枝数(花芽着生数)	短果枝花芽着生率 ^{a)}	新梢の花芽着生率 ^{b)}
100%利用	18.5(12.3)	66.4%	71.2%
80%利用	17.4(15.1)	86.7	87.5
50%利用	8.3(6.1)	73.4	46.2

a) 短果枝発芽数/全芽数×100

b) 新梢花芽数/新梢全芽数×100



「あきづき」においては、基部径が約10mm、長さ約1mの新梢について、先端二〜三芽切り落とした(80%新梢利用)予備枝において、

もつとも着花率が高くなりました(表二、三)(写真三)。

※冬季のせん定時に基部径が約10mm、長さ約1mの新梢が、いかに多くあるかが収量を決めるポイントであると言っても過言では無く、冬季のせん定よりも夏季の新梢誘引が他の品種より重要となります。

(三) 2年育成による着花向上

これまで述べたように「幸水」のような予備枝作りでは花芽の着生が難しく、二十世紀でのせん定で育成される「マチ枝作り」が基本になります。

しかし、このような育成枝でも花芽の着生が十分でなく、側枝としての維持が困難となる場合があります。そこで、さらにもう一年、先端の新梢を二〜三芽切り返し(80%新梢利用)、2年育成予備枝として利用することによって着花率をさらに向上させることができます(表四)(写真四)。

摘果時期について

(一) 果実品質への影響

一mあたり八果着果させた樹において摘果時期を検討した結果、



満開後20日頃摘果した短果枝
(9月8日)

満開後50日頃摘果した短果枝
(9月8日)

表5 「あきづき」果実の品質調査

着果部位と摘果時期	一果平均重(g)	硬度(lbs)	糖度(Brix)	pH	種子数	変形程度	
短果枝	満開後20日	591.5a	4.2	12.2a	4.98	6.5	1.05
果	満開後30日	531.6b	4.4	12.3a	5.04	5.3	1.07
枝	満開後40日	543.3b	4.1	11.8ab	5.02	5.8	1.04
腋花芽	満開後20日	573.1a	4.5	11.7ab	5.02	5.2	1.13
花	満開後30日	561.2ab	4.3	11.9ab	5.01	5.6	1.09
芽	満開後40日	521.3b	4.5	11.3b	5.01	4.7	1.15
F検定		*	n.s	*	n.s	n.s	n.s

F検定は5%で有意、n.s:有意差なし 多重比較はTukey検定 異なる英文字間で有意

表6 摘果後の花芽着生率

試験区	花芽着生率(%)	1果叢着花数
満開後20日摘果	78.5	2.1
満開後40日摘果	21.3	1.5

摘果時期が早いほど果実重が重い傾向がみられました。糖度についても、摘果時期が早いほど高くなりました。短果枝に着果させた果実と腋花芽に着果させた果実では果実重は差がみられませんが、糖度は短果枝に着果させた果実でやや高くなりました。

(二) 早期摘果による短果枝への花芽着生向上

「あきづき」の特徴として、短果枝において無着葉の果実が多いことがあげられます。この果実は肥大が悪く、結局摘果せざるを得ません。これまで試験を行ってきた結果、満開後20日頃に摘果することによって充実した花芽が着生することがわかりました(表六)(写真五、六)。



ここでは「あきづき」栽培でもっとも重要な新梢管理を中心に述べてきましたが、施肥方法や病害虫防除などを含めて、早急に栽培マニュアルを作成したいと思っております。栽培面積が増加していく中で、新梢管理をされた園とされていない園での収量差が顕著になってくると思います。全国でもトップレベルの佐賀のナシ生産者の技術力で「あきづき」を作りこなしてもらおうことを願っています。